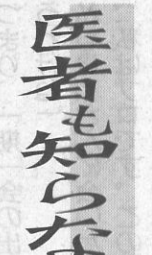
2013年(平成25年)7月24日(23日発行)　日刊ゲンダイ

医者も知らない平穏死



連載㊶

〈長尾和宏〉長尾クリニック院長。日本尊厳死協会副理事長。著書に「『平穏死』10の条件」など。

末期がんの患者さんに18種類もの薬

末期がんの患者さんに大量の薬を出すことを、病院の医者はどう考えているんやろう……。しばしば湧く疑問です。いや、慣りといってもいいかもしれない。先日も、こんなことがありました。

ある大学病院から、末期がんのSさんの在宅医療を依頼されたのです。退院の日、私はSさんより先にご自宅に着きました。タクシーで戻られたSさんを見て、驚愕！両手いっぱいに紙袋を持っていたのですが、その中には、なんと18種類もの薬が入っていたのです。

そのひとつは、抗がん剤。Sさんはもはや末期状態です。つまり、すでに抗がん剤が効かない状態。それなのにどうして、抗がん剤が必要なのでしょう？

高血圧や糖尿病の薬、血液サラサラの薬なども入っていました。がんによる腸閉塞でお腹がパンパンになっていて、Sさんは食事もままならない。そんなSさんに、これらの薬が必要でしょうか？

理解に苦しんだのは、18種類もの薬を処方されているのに、がんの痛みを抑える麻薬が入っていないことです。「お腹の痛みを何とかしてほしい」とSさんが訴えているのに、です。

「薬を飲むべきでしょうか？」と聞かれたので、「とりあえず、全部飲まなくていいよ」と答えました。貼り薬の麻薬とステロイドの注射を併用して、数日後にはSさんの痛みはかなり改善しました。

あえて点滴を行わず、軽い脱水によって腹水が抜けるのを待ち、1週間後にはSさんは少しおかゆを食べられるようになりました。18種類の薬はいまだ手付かずのままです。痛みが消え、食事もできるようになったおかげか、Sさんは笑顔を最近見せてくれるようになりました。

それにしても……。冒頭の疑問がまた湧いてくるのです。

（写真はイメージ）